

Title	「人生を生き切ること」と「文明論」との交錯 : 『無痛文明論』が試みたもの
Author(s)	吉本, 陵
Citation	臨床哲学. 6 P.63-P.73
Issue Date	2005-01-07
Text Version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/11094/3735
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

「人生を生き切ること」と「文明論」との交錯

——『無痛文明論』が試みたもの

吉本 陵

序：無痛文明論を読むということ

「われわれの文明においては、人間の『身体の欲望』が、人間自身から、『生命のよろこび』を奪っている」¹。『無痛文明論』の問題意識はこの一文に集約されている。私たちから「生命のよろこび」を奪う構造はどのようなものか、「無痛文明」がそれをサポートする構造はどのようなものか、そして私自身の生において「身体の欲望」はいかにして「生命の欲望」へと「転轍」されるのか、そのことを通じていかにして「無痛文明」の解体に至らしめ得るのか。以上のような問いかけについてさまざまな角度から考察を進めることによって、『無痛文明論』は構成されている。

森岡正博の診断によれば、現代文明は「無痛文明」の完成に向かって突き進みはじめている。その病理を克服する微かな筋道が『無痛文明論』の中で示されるのだが、『無痛文明論』を読めば分かるように、その筋道は森岡の独自の経験に裏打ちされた考察の上に構想されており、その経験に依存している。とはいえこのことは『無痛文明論』が私たち読者にとって無意味であることを必ずしも意味するわけではない。『無痛文明論』は「夜空に図形を描く」一つの「花火」²なのであり、読者はこの打ち上げられた花火をそれぞれの「絶対孤独の穴」³から見上げつつ、それぞれのやり方でそれぞれの「無痛文明論」を（テキストというかたちを取るかどうかは別にして）表明することが求められる、ということであろう。『無痛文明論』という花火に呼応するようにして読者がそれぞれの「無痛文明論」を打ち上げたとき、はじめて本当の意味でその読者は『無痛文明論』を読んだ、ということになるのだ。

本稿は、『無痛文明論』を、「人生を生き切ること」（個人レベル）と「文明論」（文明レベル）という二つの視座の交錯、という観点から読み直すことを試みるものである。以下、1ではこの観点にもとづいて『無痛文明論』の基本的な構成を確認し、2では1での議論をふまえた上で、『無痛文明論』の中の個人レベルでの議論は説得的である一方、文明レベルでの議論はいくつかの困難を抱えているのではないか、ということを描きたいと思う。

1. 『無痛文明論』の基本構成

まず、『無痛文明論』の基本的な議論を、上記の二つの視座を軸にしてまとめてみよう。

1-1. 欲望論としての『無痛文明論』

『無痛文明論』において示されている、「無痛文明」解体のためのキーは三つある。それは、「無痛文明」の「他者」ともいうべきもの、すなわち「出会い」（第二章、第四章において「条件付きではない愛」とともに語られる）「自然」（第六章）「私の死」（第七章）の三つである。この中でもとりわけ「私の死」という契機が重要である。なぜなら、森岡の思索の出発点は「私は、この有限な〔すなわちいつかは死ぬということ：引用者〕一度限りの人生を悔いなく生き切りたい」⁴というところにあるからである。「私の死」と、「一度限りの人生を悔いなく生き切る」とはつねに決定的な参照軸として『無痛文明論』の議論を支えている（このために『無痛文明論』は全編を通じて実存主義的な色合いをもっている）。

この、自らの生を悔いなく生き切る、という姿勢を背景にして、「身体の欲望」に振り回される生から「身体の欲望」を「生命の欲望」へと転轍し「生命のよろこび」を享受する生き方へ、というモチーフが登場する。このように見ていくと『無痛文明論』は独特の「欲望論」として読むことができることが分かる。「人生を悔いなく生き切る」というあり方のためには、自らの生に刻印されている「欲望」についての省察を抜きにすることはできないのだ。

『無痛文明論』における「欲望論」が従来のそれと異なる点は、森岡によれば、「多くの論者たちは、『欲望』という概念をひとまとまりのものとしてとらえてきたが、無痛文明論はそれを『身体の欲望』と『生命の欲望』の二種類に分割する」⁵というところにある。そして「身体の欲望」と「生命の欲望」の双方をうちに抱えながら、「身体の欲望」に流されてしまう傾向のある私の生をサポートする知として「開花の学」・「捕食の思想」・「宇宙回帰の知」を森岡は提示している（これらの知の内実は、すべて近代的なパラダイム——例えば近代科学、基本的人権、資本主義、民主主義など——の組み替えを試みるものである）。この三つの知を支えにしつつ、「身体の欲望」を「生命の欲望」へと不断に転轍し続けることのうちに、一つの可能性がみいだされている。

では、なぜ私たちは「身体の欲望」から「生命の欲望」へと転轍しなければならないのか。あるいはなぜ転轍することが求められるのか。転轍するということはそのまま「無痛文明」との戦いを意味するが、なぜ私たちは戦わなければならないのか。森岡は端的に答える。「私は、この有限な一度限りの人生を悔いなく生き切りたい。そしてより良く生きより良く死にたい。だから、私は戦うのだ。無痛文明の中にいたのでは、私は自分の一度限りの人生を、自分で一番納得するような形で生き切ることができない。だから私は戦うのだ」⁶と。私たちは限りある生を生きている。私たちは必ず死を迎える有限な存在である。このことは無痛文明にどれほど深く浸って生きていようと変わることはない事実だ。この一点が無痛文明と対峙する

ときの唯一の足がかりとなっている。こうして、「私の死」という契機に焦点が当てられることになる。

1-2. 無痛文明と「私の死」

『無痛文明論』の洞察の一つは、「無痛文明」の完成は「予定調和を夢見てきたすべての思想のためのユートピア」⁷であるかのように見えつつ、同時にそれは最大の野蛮の出現でもある、ということを明確に指摘した点にある。無痛文明の完成態においては、自然の荒々しさは「二重管理構造」によって支配され（第六章）、あるいは「先進国にとって壊滅的な環境破壊や経済恐慌は、やがて大枠で克服」され、「地球社会は大量浪費型文明から、循環型文明へと移行」し、「無痛文明はエコロジカルな定常型文明となる」といわれる⁸。すなわち、現代社会が抱える多くの問題が無痛文明さえ完成すれば、解決してしまうのだ。しかしながら、それはそのまま野蛮の完成でもある。なぜなら、無痛文明の完成は、「身体の欲望」による「生命の欲望」の圧殺システムの完成でもあるからである。ここで確認しておかなければならないのは、事実の問題として無痛文明が完成するかどうか、ということが問題なのではないということである。つまり、「実際のところ、無痛文明の完成に至るほどの『進歩』は達成されないだろうし、達成されるとしてもずっと先のことだから、当面の間は問題ではない」という主張は通用しないということである。というのも、「無痛文明の完成」を目指してしまっている私たち自身の、そして私たちの文明自身のメンタリティーこそがそもそもの問題なのだから。したがって、私たちはまずもってそのメンタリティー（『無痛文明論』においては「身体の欲望」、およびそれが社会的に編成されたところの「無痛奔流」という名が与えられている）を別扱し、批判的な吟味にさらさなければならないのである。

この批判的な吟味のための足場が、先にふれた「私の死」という契機である。

『無痛文明論』における「私の死」という契機は両義的である。「私の死」のゆえに、それがもたらす恐怖のゆえに、私たちはそれを束の間忘れ去らせてくれる無痛文明に助けを求め、この意味では、「私の死」という契機は、私自身と社会全体の「無痛化」を強力に促進するものとして働く。しかしながら、その反対に、「私の死」はどこまでも「身体の快楽」によっては上塗りしつくされないものとしての、無痛化の彼方にあるものとしての、究極の痛み＝「無痛文明の他者」としての、契機をも併せもっている。この後者の意味で、「私の死」という契機は無痛文明と対決する際の究極の地平を与えるものとなっているのだ。私は二度とやり直すことのできない生を生きている。私は死すべき生を生きている。私は死の瞬間、少なくともある一点において悔いのない人生を生きてきた、というかたちで自己の生を肯定したい。そのような生を「無痛文明」は可能にしてくれるのか。森岡は、否、と答える。では、いったいどうすればよいのか。いったい何が求められているのか。『無痛文明論』が示す処方箋は、自己の解体と、それを通じた無痛文明の解体、という二つのレベルでの解体作業である。

1-3. 二つの解体作業——個人のレベルと文明のレベル

まず、確認しておく必要があるのは、「無痛奔流」という概念が「自己の解体（マイクロレベル）」と「無痛文明の解体（マクロレベル）」という二つのレベルの議論をつないでいるということである。すなわち、「無痛文明」においては「個人の生における無痛化」と「社会のシステムティックな構造における無痛化」、という二つのレベルの無痛化が平行なものとして相互に補完しあっているのだが、このような状況は私の（個人の）「身体の欲望（マイクロレベル）」が「無痛奔流」として私の外部に流出し、「無痛化装置」として固着することによって成立している（マクロレベル）ということである。したがって「無痛文明」を解体する作業は、「身体の欲望」を「生命の欲望」に転換すること（＝自己の解体）を通じて、「身体の欲望」から「無痛奔流」へと至る通路を遮断し、「生命の流れ」へと向かわせ、それによって「無痛文明」は最終的にエネルギー源としての「無痛奔流」を失い、自滅していく（＝無痛文明の解体）、という筋書きになっている。『無痛文明論』を読み解くためには、これら二つのレベルの「解体」⁹がそれぞれどのようなものであるのかについて注意を払わなくてはならない。

(a) 個人レベルにおける解体作業

では、個人レベルでの解体（＝自己の解体）からみてみよう。「自己の解体」とは「『私が私であるための中心軸』に沿って、深層アイデンティティを解体してゆく」ことであり、このことが「アイデンティティの自己解体の真の意味である」¹⁰といわれる。なぜ深層アイデンティティを解体しなければならないか、というと、深層アイデンティティが構成する「自己イメージこそが、…私を根底において束縛し、がんじがらめにし、私を息苦しくさせ、生きにくくさせ、私から生命の力を奪っている張本人」¹¹だからである。また、森岡によれば「深層アイデンティティは、私が『身体の欲望』にのっとなって人生を生きようとするときに、私の生をささえる基盤となるもの」¹²なのであり、「身体の欲望」に結びつく性質をもっている。そして、「深層アイデンティティ」を「生命が湧き上がってくる所の通路」¹³としての「私が私であるための中心軸」に沿って解体するとき、「私の奥底に存在している『生命の力』は、私の『中心軸』に沿ってあふれ出てきて、まったく未知の世界へと私を突き抜けさせようとする」¹⁴といわれる。

もちろん森岡は、「中心軸」に沿って「深層アイデンティティ」を解体していくことが容易に達成されるとは考えていない。それは「果てしない戦い」¹⁵なのであり、「中心軸は、何度も何度も違った方角から反復される、中心軸の発見のプロセスとしてのみ存在しうる」¹⁶のだ。すなわち、「中心軸」に沿う「ほんとうの私」というものは、無痛化の呪縛を解き続ける絶えざるプロセスを通じてのみ見いだされうるようなものなのである。とするならば、「身体の欲望」に流されやすい私が「ほんとうの私」と今考えているものは実は「深層アイデンティティ」が偽装したものであるという可能性は常に残されているのだから、『無痛文明論』において求められる「自己の解体」というものは、そしてそこから立ち現われる「ほんとうの私」というものは、不断の自己批判を通じてのみ得られるものであり、換言すれば「『深

層アイデンティティ』ではないもの」という否定形を通じてのみ得られるものだけということになる。このことを強く理解すると、『無痛文明論』で語られる「ほんとうの私」は必ずしも肯定形で語られうるのではなく、むしろ「深層アイデンティティ」の否定形でのみ語られ、みいだされうる、ということにならざるをえないのだ。

とはいえ、自己の「深層アイデンティティ」の解体は「中心軸」に沿って遂行され、「深層アイデンティティ」に結びつく「身体の欲望」は「中心軸」を流れる「生命の欲望」へと転轍されるという道筋は、ネガティブなかたちではあっても、以上のようなかたちで確保されることとなる。

(b) 文明レベルでの解体作業

次に文明レベルでの解体について見てみよう。『無痛文明論』が「文明論」であるゆえんは、今この私がいかにして生きていけばよいのかという (a) でふれたレベルでの議論にとどまらず、その議論を文明レベルの問題に結びつけて考察しようとする点にある。その限りで、あくまで焦点は「無痛文明の解体」に当てられているといえる。すなわち、「無痛文明の解体作業を進めるためには、『身体の欲望』を『生命の欲望』へと転轍するだけでは不十分」なのであり、「世界が変わるためには、私の外部に存在する『無痛化装置』の解体が必要である」¹⁷ということである。

「無痛文明」の解体において、最大の問題となっているのは、自分自身がその一部に組み込まれているところのものを自分自身の手で解体するということは、どのような作業であり、何をなすことなのか、という問題である。森岡は無痛文明を「自己治癒するシステム」¹⁸と名づけ、このシステムの解体を目指して戦うとはそもそもいかなる意味なのか、という問題が「無痛文明論最大の謎」¹⁹であるという。

この解体作業＝戦いとその終わりは、私たちが「戦い」という言葉でイメージするものとはおよそ異なるようなものとして描かれている。すなわち、「この熾烈な戦いの未来において、『この戦いの枠組み』それ自体が自己崩壊するような地点に達するまで、われわれは戦い続け、負け続けなければならない。無痛文明が勝つこともなく、戦士たちが勝つこともなく、ともに負け戦を繰り返していくうちに、『戦いの構図』が自己崩壊し、社会全体が予想もできない何物かへと変容する可能性がある。その時、無痛文明との戦いは終結する」²⁰と。

このようなある種の異様さが生じるのは、無痛文明を欲しているのはほかならぬ私たち自身（あるいは「自分のなかに巣くっている内なる無痛文明」²¹）だからである。無痛文明に生きる私たちは内からと外からとの挟み撃ちにあっているのだ。したがって、「無痛文明との戦い」は、私たち自身の身体の欲望から発出し、外部から私たちを飲み込む無痛奔流と対決しつつ、同時に私たちの内部の身体の欲望とも対決しなければならないという両面作戦を通じてしか、成立しえないのである。ここに無痛文明との闘いの困難をみることができる。無痛文明との戦いが両面作戦であるがゆえに、戦う私は、無痛文明に勝つわけにもいかないし、負けるわけにもいかない。なぜなら、無痛文明に勝とうとすること自身が、「身体の欲

望」を通じて、無痛文明にエネルギーを供給することになるからであるし、無痛文明に負けることは、そのまま無痛奔流の中に飲み込まれてしまうことを意味するからである。それゆえ、勝つでもなく負けるでもなく戦うことの意味が変様する局面の成立を求め続ける。このことが「無痛文明との戦いの終結」の意味なのである。

*

*

個人レベル・文明レベルでの解体のために『無痛文明論』が提示してる処方箋は三つの段階に分かれることである。まず、最初に必要なのは「深層アイデンティティ」を「私が私であるための中心軸」に沿って解体することであり、その上で 身体の欲望を生命の欲望へと転轍し続けることであり、この転轍の主体である「ほんとうの私」が無痛戦士として、無痛化装置の解体にとりかかるのだ。無痛文明との「戦いの順序は、自己解体、転轍、無痛化装置の解体と続く」²² ののである。

2. 無痛文明との戦いとその終わり

2では、1での議論を踏まえて、『無痛文明論』がはらむ問題点を指摘していく。

2-1. 善悪の彼岸、真偽の此岸——「戦士」という主体の問題

『無痛文明論』の議論にしたがえば、無痛文明と戦うことを決意した戦士は、無痛文明によって用意周到に幾重にも埋め込まれた罠を、そのつどかいくぐることが求められる。『無痛文明論』の特徴は、無痛文明との戦いが、時として反倫理的なものになりうることを認めている点にある。

具体的には、「無痛文明からのさまざまな攻撃のかたち」²³の例として、「道德の言葉」²⁴が挙げられている。すなわち、無痛文明と戦うこと自身がある種のエゴイズムではないかという倫理的な言説が無痛化装置として働いてしまいうる、ということである。したがって、たとえ道德的なものとして社会に流通している事柄であったとしても、それが無痛化装置として働いてはいないのか、ということに疑う必要があるということになる。私たちの社会自身がすでにある程度まで無痛化してしまっているのであるから、社会の側の基準（たとえば道德）と自らの中心軸に即して生きることを決意したものの判断とがずれてしまった場合、「今の社会の基準を信じるのではなく、自己解体を経て自らの中心軸にまで降りてきた自分自身の判断を信じなければならない」²⁵ というのである。

また、『無痛文明論』第五章と第八章でふれられている「捕食の思想」は、森岡自身も認めているように、「近代の平等主義に反するよう見えるし、強者の自己正当化の思想のようにも見える」²⁶ ものである。この捕食の思想を森岡が提示するのは、「身体の欲望」との戦いがたんなる禁欲主義に陥ってしまうことを避けるためである。「身体の欲望」を抑圧することに全力を傾けるのではなく、別のかたちで、すなわち「生命の欲望」に転轍したかたち

で私たちの欲望を放出していくというあり方に、森岡は一筋の希望を見るのである。

このように、『無痛文明論』の議論はある意味で「善悪の彼岸」にある、といえる。ここには「よい」とか「悪い」という言葉自身の基準を個人レベル・文明レベルでの「自縄自縛の構造」の解体の延長線上でとらえなおさなければならない、という問題意識が明確に現われている。

その一方で、「無痛文明論」の議論は「真偽」に関してははっきりと「此岸」に残り続けている。すなわち、「私が私であるための中心軸」に即して「深層アイデンティティ」を解体するところの「私」が、つまり「深層アイデンティティ」とは区別される「ほんとうの私」というものが、無痛文明と戦う戦士として「無痛文明論」の議論の根幹に据えられているのである。このことは、「悔いなく生き切る生」というあり方と「嘘の人生」²⁷という対比に明確に示されている。

しかしながら、ここには一つの困難がある。それは、「無痛文明」の解体を目指す「戦士」という主体のあり方に関するものである。「無痛文明と戦う主体は、まずは、中心軸に沿って生き切ろうとするこの私である」²⁸といわれる。もちろん、森岡はこの「戦士」のあり方について非常に慎重な表現をしている。それは「無痛文明と戦い続けるためにもっとも必要なのは、『自分はまったく戦えていないのかもしれない』という自意識である」という文章や、「無痛文明との戦いとは、『誰が真の戦士なのか』が原理的には誰にもわからないという戦いである」²⁹という文章においてみられる。ここでいわれる「戦士」であるための要件の一つはもちろん、「中心軸」に即して「深層アイデンティティ」を解体した(しつつある)ところの「私」であることである。しかしながら、1-3 (a) での議論にしたがえば、そのような「私」は不断の自己批判をつうじてのみかろうじて得られるような何ものかであり、ポジティブ(肯定形)なものとしては語られないものであった。とするならば、その「私」というものを無痛文明と戦う「主体」としてポジティブに設定することには無理があるのではないか。

もちろん、森岡はこの「主体」を近代的な主体とははっきり異なるものとして描こうとしている。そのために、「中心軸通路」³⁰という概念を示して、「私」というものを「<私とは、私を支えるすべてのものを、私の限界ある生を通して、私ではない何かに向かって伝えてゆく主体である>」³¹として定式づけている。しかしながら、このような主体概念もあくまで「自己解体」の果てにみいだされうるものであり、ポジティブなものとして設定することにはどこまでも困難が残ってしまうのではないだろうか。1の最後で見たように、無痛文明の解体は三段階で構想されていた。「自己の解体」はその最初の段階に置かれており、無痛文明との戦いの前提をなしているのだが、その主体を積極的に取り出すことが困難である限り、そして「無痛文明の解体」を「無痛戦士による戦い」として表象する限り、この問題は解消されないのではないだろうか。

2-2. 「戦いの終わり」の問題

もう一つの問題点は「無痛文明」との戦いの終わりに関するものである。森岡は「自己解体と転轍と無痛化装置の解体の作業を続けることによって、われわれの営みは、ほんとうに

社会を変革するところにまでたどり着くのであろうか」という問いを立て、「無痛文明論はイエスと答える」³²と応じている。無痛文明との戦いの終わりについては、次のように描かれている。「この熾烈な戦いの未来において、『この戦いの枠組み』それ自体が自己崩壊するような地点に達するまで、われわれは戦い続け、負け続けなければならない。無痛文明が勝つこともなく、戦士たちが勝つこともなく、ともに負け戦を繰り返していくうちに、『戦いの構図』が自己崩壊し、社会全体が予想もできない何物かへと変容する可能性がある。その時、無痛文明との戦いは終結する」³³と。

「無痛文明」以降の社会がどのようなものか、を具体的なイメージで語ることはおそらくできないであろうし、森岡自身もまたほとんどしていない。とはいえ少なくとも次のようにはいえるはずである。「無痛文明」以降の社会は定義上「無痛文明」との戦いが終結した社会なのであるから、その社会においては「無痛化」というあり方は消滅していることになる。しかしながら、そのようなことは本当に可能なのであろうか。森岡の定義によれば「身体の欲望」は私たちの生の一部なのであり、私たちが生きている限り「身体の欲望」は消滅することはない。とするならば、私たちは生きている限り「身体の欲望」から発する「無痛化」への願望というべきものに対峙し続けなければならないのではないか。それを不断に「生命の欲望」へと転轍し続けることが要請されるのではないか。そしてこの要請は社会の構成員全員に向けられるものなのであるから、「無痛化」に対するミクロレベルでの戦いは終わりを告げることはそもそもないのではないか。したがって、「無痛文明との戦いは、無痛文明との戦いという構図に意味がなくなるという形をもって、終わりを告げる」³⁴としても、「無痛化に対する戦い」が終結することは、私たちが生存し続ける限り、原理的にありえないのではないだろうか。「無痛文明」が終わると終わらないと関わらず私たちは「無痛化」への傾向性からは逃れ得ないのではないだろうか。結局のところ私たちは「無痛化」への傾向性に満ち満ちている社会（あるいは文明）に生き続けるということにならざるをえないのではないだろうか。

以上の想定を認めるならば、「無痛文明」との戦いが終わるのは、身体の欲望から流出し、社会的に編成された「無痛奔流」を鎮めることができたとき、ということになるだろう。つまり『無痛文明論』で示されている「無痛文明」との戦いの終わりとは、「外なる無痛文明」との戦いの終わりということであって、「内なる無痛文明」との戦いは終わることはない、ということになるのだ。その一方で、「(外なる) 無痛文明との戦い」は前節でふれた「戦士」という主体の問題をはらんでしまっている。

「無痛文明との戦い」は1-3 (b) で見たように内外の無痛文明への両面作戦を通じて遂行されるのであるが、内への戦いには終わりがなく、外への戦いには問題が生じてしまう。「無痛文明」の解体についての文明論のレベルでの議論がいきおい抽象的なものとなり、個人のレベルでの議論におけるような具体性を獲得できていない背景にはこのような問題が残されているからではないだろうか。

2-3. 「戦う私」の問題

ここで、もう一度「戦う私」という主体の問題に立ち返ろう。『無痛文明論』においては、「私」というものは「表層アイデンティティ」・「深層アイデンティティ」・「私が私であるための中心軸」の三層構造で示され、「中心軸」に即したあり方が無痛文明と戦う私として設定されていた。しかしながら、「私」というものは徹底的に「身体の欲望」に貫かれ、「無痛奔流」にからめとられた存在としてこの世界で生きているのであり、そこから（少なくとも「身体の欲望」から）逃れることはできない。その「私」こそがむしろ「ほんとうの私」だといいたくなるほどなのである。もちろん、このような「私」のあり方に森岡は十分気がついていて、それゆえに、「無痛文明と戦い続けるためにもっとも必要なのは、『自分はまったく戦えていないのかもしれない』という自意識である」³⁵と書きつけられているのだ。

この「ほんとうの私＝戦う私」は、先に指摘したように、否定形を通じてのみ得られるようなものであった。もしこれを肯定形で語ろうとするならば、それはあくまで「論理的な要請」としてのみ担保されうる、ということになるのではないだろうか。「ほんとうの私＝戦う私」がいて、無痛文明と戦っているわけではない。そうではなく、「無痛文明」との、あるいは「無痛奔流」との戦いの中で、うまく戦えているとき、そのつど「ほんとうの私＝戦う私」が世界に生じるのであって、「ほんとうの私」が出发点となって「戦い」が成立しているわけではない、ということである。このように考えるならば、「ほんとうの私＝戦う私」をポジティブに設定することなく、無痛文明との戦いを語りうる地平が開かれうるということにはならないのであろうか。

しかしながら、このような議論を『無痛文明論』はうけいれることはできない。なぜなら、『無痛文明論』にしたがえば、このような議論こそが無痛文明からの攻撃だからである。そのような「私」のあり方は無痛文明に依存したあり方になってしまっているのだ。前段落での議論にしたがえば、「ほんとうの私＝戦う私」は無痛文明との戦いにおいてのみ可能となる「私」だということになる（つまり、「私」の存在は無痛文明の存在に依存していることになる）のだが、その「私」はすでに「無痛文明」に取り込まれ内部化されてしまっているという問題が生じてしまうのである。したがって、『無痛文明論』は前段落の意味での「ほんとうの私＝戦う私」の立場に立つことはできない。『無痛文明論』は「無痛文明」の陥穽に陥らないよう「ほんとうの私＝戦う私」をポジティブに設定せざるを得ないのである——しかしそれに伴う「戦う私」という主体の問題もまた積み残されたままなのである。

森岡は『無痛文明論』のなかで個人的な体験を幾度か語りつつ、「私が私であるための中心軸」が実際に可能であること、「生命のよろこび」というものを人は享受しうることを示している。おそらくこのことは森岡自身の体験に基づく確信なのであろう。この確信の上で、森岡は無痛文明と戦う「戦士」を肯定的に描き出し、その戦いの行く末を議論した。この「戦士」は「内なる無痛文明」と「外なる無痛文明」との両面に戦いを挑まなくてはならない。2-2の議論によれば、「内なる無痛文明」との戦いは終わることがなく、戦いの終結として想定されているのは「外なる無痛文明」との戦いであり、その戦いの終結は社会的に編成された無痛

奔流を鎮静させることであった。しかしながら、2-1 と 2-3 の議論にしたがえば、戦士が「外なる無痛文明」に戦いを挑むとき、戦士という「主体」を戦いの前提とすることができるのかどうかという問題が生じることとなる。『無痛文明論』において「暗闇のなかでの自己解体」で議論されたような具体性が「(外なる)無痛文明」との戦いにおいては語られえないのは、「文明レベルの解体」という問題構成のうちに上記の問題が生じるからではないであろうか。

結

2 で見た二つの問題点は文明レベルに関わる議論の中で見出されるものであった。『無痛文明論』においては、「身体の欲望」と「生命の欲望」、「深層アイデンティティ」と「中心軸」、「開花の学」・「捕食の思想」・「宇宙回帰の知」といった新しい概念枠を用いて、個々の具体的な事例——例えば選択的中絶、条件付きの愛・条件付きではない愛、アディクション、自傷行為、自縄自縛の構造、共犯関係的支配などの事例——が分析され、それらに対して一定の処方箋が示される。その議論が非常に説得的である一方、「文明論」という視座においては、そこに内包される困難さゆえに、議論が分かりにくくなっているのではないだろうか。したがって『無痛文明論』は「文明論」としてよりもむしろ、ミクロなレベルでの個々の日々の営みをサポートするものとして読まれるとき、有効性を発揮するのではないだろうか。換言すれば『無痛文明論』は「無痛文明」の中にすでに飲み込まれ「身体の欲望」に突き動かされつつも、それでもなお「悔いのない人生」を送りたいと考える人たちに対して、個々の具体的な実践の領域において、いかに問題に対処し、生きていくべきなのかをチェックするための参照軸としての役割を果たすものとして読まれるべきなのではないだろうか。

注

1 『無痛文明論』、p.18

2 同書、p.205

3 同書、p.205

4 同書、p.135

5 同書、p.358

6 同書、p.135

7 同書、p.35-36

8 同書、p.346

9 『無痛文明論』においては「解体」は、自己自身の解体・親密な人との関係（正確には共犯関係的支配）の解体・文明の解体の三つに分けて議論がなされているが、「親密な人との関係」は基本的に一対一の関係として議論されているので、本稿では解体作業を個人と文明の二つのレベルで考察していく。

10 同書、p.172

11 同書、p.167

12 同書、p.170

- 13 同書、p.171
- 14 同書、p.171
- 15 同書、p.172
- 16 同書、p.173
- 17 同書、p.394
- 18 同書、p.410
- 19 同書、p.412
- 20 同書、p.442
- 21 同書、p.137
- 22 同書、p.394
- 23 同書、p.113
- 24 同書、p.116
- 25 同書、p.223
- 26 同書、p.368
- 27 同書、p.135
- 28 同書、p.388
- 29 同書、p.439
- 30 同書、p.335
- 31 同書、p.338
- 32 同書、p.440
- 33 同書、p.442
- 34 同書、p.442
- 35 同書、p.439

